

# 書くひと

(20170520~20160701)

## 大村伸一

世間のことはよく知らないのでまちがったことを書くかもしれないが、案外まっとうな事を書いてしまって誰かに同意をいただくこともあるかもしれないとも思っている文章を書くということは慣れるまでに時間のかかるものであり、慣れるまでは思うように書けないものだから、わたくしが文章を書くことに慣れているのかと問われればためらいもなく否と答えざるをえない世間のことをよく知らないということよりも書くことに慣れていないがために、まちがったことであるというよりも意味の分からないことを書くかもしれないというべきなのかもしれない

そもそも文法が毎日のように変わるのだから誰であれ書くことに十分慣れたと断言できるまでに至るわけではないのであり、であればこういうこともいたしかたのないことであるということというのは、文章を書くことに慣れていないために意味の分からないことを書くかもしれないということだとはいえ、それは言い訳にすぎないと言う者もいる確かにいるしかし、文法というものが時々刻々変わり続けているのだから書くということがそれに影響を受けないわけではないのであり、だとすれば文法の不変におきる変化により本来誰もなにも書けはしないのだから、書くことに慣れることができないというのは当然の結果であるといわざるをえない

仮にもしも文法が変わらなれば誰でも書き続けることができるだろうそれはそうなのである文法が決して変わらないのならばいつか間違った文を書くことも文法の正しい文さえ間違えて読まれることもないのであり故に、安心してどんな事柄でも書き続けられるはずだしそうであれば、書き慣れるということもあるかもしれない確かに、間違いなく書き慣れることだろう

一方で、文法と同じようにことばが増えたり減ったりすることも知られているこちらは書くことにさほど障害にはならないと思われる思うのは私でありおそらくあなたであるつまり、ことばが増えようと減ろうと私にはわからないのだしそれは読む者についても言えることであるいつのまにか増えていたために知らなかった言葉を書くことはないし、読んだとしてもその意味が分からないことを気にする者などいはいはしない言葉が減ったために知っていた言葉が失われていても書いたとたんその意味が分からなくなるわけでもなければ、ことばが減るということが今読んだその言葉が目の前から消えるというわけでもないのだから、言葉の増減と書くことに慣れるということとはまったく関係のない話であるだとすれば、文法が時々刻々変わり続けているといわれても私にはそれが分からないという絡線は言葉の増減の場合と同じなのだから、文法が変化し続けるから書き慣れないということの理由にもならないといわれても反論はできない

このごろは文章にというか文章を書くことに正義を振りかざす者が増えていて、ここまで書いてきたようなことについてさっそく忠告を受けるいわく、それはことばではなく単語であるいわく、変わり続けるようなものは文法ではなく文例にすぎないいわく、文法とは別に文章を書く規則というものもあるいわく、おまえの書いていることははじめから矛盾しておりそんな文章には意味などあるはずがない

確かに増減しているのはことばではなく語彙というものだ語彙に直接会ったことはないが会ったとしてもそれが語彙だとは気づかなかつたろうもしも会ってそれが語彙だと気づいたならば増減しているのかと尋ねられるだろうか初対面の相手にそんな不躰なことを聞くことはできはしないそれにももしも失礼にもそんなことを聞いたとしても語彙は決して答えてはくれないだろうそもそも私は語彙には面識がない

変わりつづけるものが文法ではなく文例であるにしてもよく考えてみれば文法とは文例を整理して利用しやすくした規則にすぎないそうであれば、文例は増え続けるものであり文例が増えれば例外が生まれ文法も増えていくだろうそれどころか、もはや誰も使わないような文例は消えてそれを含むような規則は一般化され元の規則は消え文法も減っていくというわけだ増減がある程度以上進めばその言語はもはや以前とは別の言語になってしまういつ変わったのかは分からないそれだけのことで文例が一枚の紙であるならば文法はそれを束ねたノートでありそのノートには新しい規則を書き加えることもどれかのページを破りさることもできるもしも、いま私の隣に文法が座っているとすれば、文法はノートであるとしか私には分からないだろう見知らぬ誰かの体に絵を描くような無作法ができないのと同じようにそのノートに私は何も書き加えられない

文法とは別に文を書く規則があるということも奇妙な話だそれこそが文法ではないのだろうかそれだけでなく、その規則は厳重に隠されていて規則に従っているのか破ってしまったのかは容易には分からないようになっていくという規則を破るや否や私は文章を書くことが禁じられ何も書けなくなるのだという

世間のことはよく知らないのでまちがったことを書くかもしれないが、案外まっとうな事を書いてしまって誰かに同意をいただくこともあるかもしれないとも思っている文章を書くということは慣れるまでに時間のかかるものであり、慣れるまでは思うように書けないものだそして、わたくしが文章を書くことに慣れているのかと問われればためらいもなく否と答えざるをえない世間のことをよく知らないということよりも書くことに慣れていないがために、まちがったことであるというよりも意味の分からないことを書くかもしかかもしれないというべきなのかもしれない

そもそも文法が毎日のように変わるのだから誰でもあれ書くことに十分慣れたと断言できるまでに至るわけではないのであり、であればこういうこともいたしかたのないことであるということというのは、文章を書くことに慣れていないために意味の分からないことを書くかもしれないということだとはいえ、それは言い訳にすぎないと言う者もいる確かにいるしかし、文法というものが時々刻々変わり続けているのだから書くということがそれに影響を受けないわけではないのであり、だとすれば文法の不変におきる変化により本来誰もなにも書けはしないのだから、書くことに慣れることができないというのは当然の結果であるといわざるをえない

仮にもしも文法が変わらなるとすれば誰でも書き続けることができるだろうそれはそうなのである文法が決して変わらないのならばいつか間違った文を書くことも文法の正しい文さえ間違えて読まれることもないのであり故に、安心してどんな事柄でも書き続けられるはずだしそうであれば、書き慣れるということもあるかもしれない確かに、間違いなく書き慣れることだろう

一方で、文法と同じようにことばが増えたり減ったりすることも知られているこちらは書くことにさほど障害にはならないと思われる思うのは私でありおそらくあなたであるつまり、ことばが増えようと減ろうと私にはわからないのだしそれは読む者についても言えることであるいつのまにか増えていたために知らなかった言葉を書くことはないし、読んだとしてもその意味が分からないことを気にする者などいはいはしない言葉が減ったために知っていた言葉が失われていても書いたとたんその意味が分からなくなるわけでもなければ、ことばが減るといことが今読んだその言葉が目の前から消えるというわけでもないのだから、言葉の増減と書くことに慣れるということとはまったく関係のない話であるだとすれば、文法が時々刻々変わり続けているといわれても私にはそれが分からないという絡線は言葉の増減の場合と同じなのだから、文法が変化し続けるから書き慣れないということの理由にもならないと言われても反論はできない

このごろは文章にというか文章を書くことに正義を振りかざす者が増えていて、ここまで書いてきたようなことについてさっそく忠告を受けるいわく、それはことばではなく単語であるいわく、変わり続けるようなものは文法ではなく文例にすぎないいわく、文法とは別に文章を書く規則というものもあるいわく、おまえの書いていることははじめから矛盾しておりそんな文章には意味などあるはずがない

確かに増減しているのはことばではなく語彙というものだ語彙に直接会ったことはないが会ったとしてもそれが語彙だと気づかなかっただろうもしも会ってそれが語彙だと気づいたならば増減しているのかと尋ねられるだろうか初対面の相手にそんな不躰なことを聞くことはできはしないそれにももしも失礼にもそんなことを聞いたとしても語彙は決して答えてはくれないだろうそもそも私は語彙には面識がない

変わりつづけるものが文法ではなく文例であるにしてもよく考えてみれば文法とは文例を整理して利用しやすくした規則にすぎないそうであれば、文例は増え続けるものであり文例が増えれば例外が生まれ文法も増えていくだろうそれどころか、もはや誰も使わないような文例は消えてそれを含むような規則は一般化され元の規則は消え文法も減っていくというわけだ増減がある程度以上進めばその言語はもはや以前とは別の言語になってしまういつ変わったのかは分からないそれだけのことだ文例が一枚の紙であるならば文法はそれを束ねたノートでありそのノートには新しい規則を書き加えることもどれかのページを破りさることもできるもしも、いま私の隣に文法が座しているとすれば、文法はノートであるとしか私には分からないだろう見知らぬ誰かの体に絵を描くような無作法ができないのと同じようにそのノートに私は何も書き加えられない

文法とは別に文を書く規則があるというのも奇妙な話だそれこそが文法ではないのだろうかそれだけでなく、その規則は厳重に隠されていて規則に従っているのか破ってしまったのかは容易には分からないようになっていくという規則を破るや否や私は文章を書くことが禁じられ何も書けなくなるのだという

このように、自らの文章を二度繰り返して読んでみて明らかなのは、確かにそのような規則が存在せざるをえないということだ。一度目は少しも気づかなかったが、さすがに二度目に読み返すとそれは明白だった。考えてみれば確かにそのような規則が存在する。存在せざるを得ないことは初めから明らかだった。だとすれば、ここまで書いてきたものは、文章ではないということだろうか。間違いなくそうであった。勿論、文章などではなかった。こうして読み返してみるだけで、そこに何が書かれているのか意味が通じない。二度目に読んだ時、そんな文章を一度読んでいたのにもかかわらず、そんな文章が世界に存在するということが信じられなかった。今となってはこんなものがよく書けたものだと感心しさえする。確かに、文法だけでなく正書法も厳密に守らなくてはならないのである。そうでなければ誰にもこ

とばは伝わらない。自分にさえ伝わらないのだから、伝わらなければ言語ではないということだ。その規則に従うとき、私はこのようにして書き続けることができるようになる。

意外に思うかもしれないが、今日という日は特定のある日ではない。さまざまな日でありさまざまな曜日の不特定の時間がここにある。それは、これらの文章が、さまざまな日でありさまざまな曜日の不特定の時間に書かれたのと同様に、また別のさまざまな日やさまざまな曜日のまた異なる不特定の時間に読まれているからである。勿論、同じ日であり時間であるというのはカレンダーや時計の上でのことである。我々には同じ時間など存在しはしない。それだけでなく、たとえば六月五十七日であると書かれていれば、六月五十七日でもあるだろう。三百二十零半日であるといわれれば、三百二十零半日であるのだろう。そのようなありもしない無数の時間を私は本当に書いているのだろうか。そしてあなたはそれを本当に読んでいるのだろうか。確かめようのないことにこだわってはいけなく誰かが言っていた。言っていたなどと思い出したようなことを書いているが本当に誰かが言っていたのかどうかははっきりしない。そもそも、誰だったのかは知らないが、そのような蘊蓄を誰かが言っていたのではなく書いていたのだろうと思う。

ここに至ってはもう隠すことなど不可能だと思うが、私は文に読まれていた。注意深くさえあればわかることだが、私ははじめから文に読まれていたというわけだ。文を書いているとばかり思っていたが、文に書かれ、文に読まれていたのである。そんなわかりきったことをあらためてことばにするのもどうかと思うほどに明らかなことは明白だった。書かれなければ存在せず、読まれなければ存在しないような私が文に読まれずに他の誰に読まれるというのだろうか。そんなことはありえない。そんな明白なことに気づくまでずいぶん時間がかかったように思う。しかし、気づいた以上、それを忘れることはできないだろう。忘れるまでの時間は気づくまでの時間の何百倍もかかるはずだ。それほど長い時間が必要なのであれば、永遠をすぎていることに気づかずになお忘れずにいることもあるかもしれない。

私を読んでいた文がどのような文なのかは、そう簡単には分からないだろう。確かに多くの文が私を読み、それはいまも続いていて、増加する多くの文が次々と私に読み耽っている。よく知られている通り、読まれるたびに私は冷えてゆき、内臓はすでに氷塊だ。それほど多くの文が私を読んでいたのだとすれば、彼らは他でもない図書館にいるのだろう。図書館以外にそんなに多くの文がある場所などありえないからである。文は図書館の本の中で私を読んでいるのだろう。それほどたくさんの文章があれば、どの文が私を読んでいるのかを特定しにくいからである。勿論、本当に文が私を読んでいるのかどうかは確かめようがないのではないとも思う。だがそのような疑問が湧いたとしても、そもそも図書館にあるどのひとつの文も私を読んでいないということのほうが考えにくいだろう。むしろ、図書館にあるすべての文が私を読み、お互いに感想を話し合うその声で図書館の司書は頭をかかえているのではないだろうか。中には私が気に入らないといって読もうとしない文もあるのかもしれないが、それはおそらく文とは呼ばれてはいないはずだ。

文に読まれていることが不愉快かということそんなことは決してない。読まれるたびに体の表面あるいは内側を何かに触れられているように感じる。触れられた部分は気持ちよく、その気持ち良さに浸るためには、より読まれやすくなりたいと願うものだ。幸い私には読者としての経験があるので、どういう文になれば読まれやすくなるのかはよくわかっている。漢字を使わず句読点をたくさん打てばよいのである。それだけのことでずいぶん読みやすくなるものだ。だからといって、こ、れ、で、は、な、い、。、。、などというのはいただけない。それは文ではないからである。そういう注意を怠らなければ多くの文章が私を読むことになるだろう。そして私は確実に文になっていくだろう。どこかのどれかの文に読まれるたびに自分がより完全な文にかわってゆくのだという実感さえある。

私を読んでいる文が具体的にどのような文なのかは分からない。もしも目の前でその文が私を読んでいたとしても私はそれがその文だとは気づかないだろう。だとすれば、同じように自分が文になったとしても自分ではそれに気づかないはずだ。だとすれば、文になるなどということは単なる幻覚にすぎないのかもしれない。確かに幻覚にすぎないのかもしれない。だがそれでもいつか私が文に変わり終えた時、私がいったいどのような文になるのだろうかと思うと鼓動は奇妙なほど増加する。愚かな疑問ではあるが、いつか文になった私もまた私自身を偶然であれ意図したものであれ読むのだろうか。それとも私は自分を読まないだろうか。読むか読まないかあるいは読めるのか読めないのか、これらの選択肢のいずれかであれ、どれでもないにしろ、今の私にはそれがどれなのかあるいはどれでないのかをいつか知ることになるのが一番の楽しみである。そんなことを楽しみだと感じるの、私がすでに文になってしまっているからかもしれない。文でなければそんなことを楽しいとは感じないだろう。とはいえ、もしも文になってしまっているのであれば、今まさに文が文を書いていることになるのだが、そんなことができるのかと問われればそんなばかなことはありえないと答えるしかない。つきつめて考えれば、文にできることといたら、おそらく他の文を模倣することくらいだろう。私を書いているのが他の文でないのと同じように、文となった私もまた文を書くことはできまい。あるいは世界は

すでに変わりはて、いまや世界から文が消えてしまっているのかもしれない。もちろん、そうなのである。それ以外に答えはありえない。ここには文などありはしない。